

リマ・バレット「クララ・ドス・アンジョス」⁽¹⁾(翻訳)

岐部雅之

解題

二〇二二年にブラジルは旧宗主国ポルトガルからの政治的独立二百周年を迎えたが、文学史的には近代主義時代を振り返る契機の間でもあった。というのも、サンパウロ市立劇場で開催された一大文

化イベント「近代芸術週間 (Semana de Arte Moderna)」の開催から百周年を迎えたからである。ブラジル文学アカデミー (Academia Brasileira de Letras) は、同年三月から四月にかけて「近代ブラジル (Brasil Moderno)」と題した一連の講演会を企画し、アカデミー会員で詩人のアントニオ・カルロス・セキン (Antônio Carlos Secchin: 1952-) や音楽家ジルベルト・ジル (Gilberto Gil: 1942-) が参加するなど、リオデジャネイロ市中心街にあるアカデミー本部で記念の年を盛り上げた。²⁾

一方、その華やかな舞台とは別に、二十世紀初頭に活躍したブラジル人作家リマ・バレット (Lima Barreto: 1881-1922) が没後百周年を迎えた。米国プリンストン大学とブラジルの大手出版社 Companhia das Letras が共同で特別サイトを開設し、映像やテキス

ト等を通じてリマ・バレット文学の普及を図っている。³⁾ このサイトは「近代芸術週間」の開催期間 (百年前の二月十三日から十八日) をより強く意識してか、アカデミーの講演会に先立つ二月十六日に立ち上げられている点も興味深い。

今回翻訳した短篇「クララ・ドス・アンジョス (Clara dos Anjos)」は、一九一九年に雑誌『ラテンアメリカ (América Latina)』で発表され、翌一九二〇年に短篇集『物語と夢 (Histórias e sonhos)』に収められた。ただし、リオデジャネイロ市郊外に住む混血の若い女が白人のならず者に誘惑された末に捨てられるという構想自体は一九〇三年から一九〇四年ごろにはすでにあった (RESENDE 2012: 9)。また、一九二二年のリマ・バレットの死後、一九二三年二月から一九二四年五月にかけて雑誌『ソウザ・クルス (Souza Cruz)』に長篇の連載小説として掲載されたあと、一九四八年には小説『クララ・ドス・アンジョス』の初版が刊行された。つまり、短篇を公にするかたわらで、リマ・バレットは作家人生を通じて「クララ・ドス・アンジョス」に向き合っていたと言える。

長篇では短篇には出て来ない登場人物や名前の書き換えが一部施

されているほか、暴力や殺人事件などのミステリー要素が加えられ、クララ個人の経験が当時の貧しい混血の女性たちを象徴する描写となっている。とはいえ、短篇では余分な要素が削られているからこそ、クララの哀れな運命を通して人種差別や社会格差の問題が一際鮮やかに映し出されている。その点は、両作品における彼女の最後の言葉にも端的に表れている。長篇のクララが「私たちは生きていても意味のない人間なのよ (Nos não somos nada nesta vida)」(BARRETO 2012: 294、傍線訳者) と言うのに対して、短篇では「私は生きていても意味のない人間なのよ (eu não sou nada nesta vida)」(BARRETO 2008: 221、傍線訳者) と嘆いているのである。奴隷制度が廃止されて数十年が経過した二十世紀初頭のリオデジャネイロ社会にあっても、クララのような郊外に住む混血や黒人の境遇は何一つ変わっていないことが示唆されている。(解題おわり)

クララ・ドス・アンジョス

アンドラーデ・ムリシに捧ぐ

郵便配達人ジョアキン・ドス・アンジョスは小夜曲^(セレナーデ)の似合う男ではなかったが、ギターを弾き、モデューニャ⁽⁶⁾を聴くのを好んだ。むかし流行ったフルートも吹いた。音楽家を気取って、ワルツやタングの作曲をし、モデューニャの伴奏もした。

音楽の基礎はディアマンティーナ⁽⁶⁾近郊の生まれ故郷で身につけ

たものの、そこからの上達は見られなかった。

このいかにも中途半端な音楽への志は、彼の生きて来た道そのものでもある。有名な弁護士に雇われていたが、妻と娘のために年金を受け取れる手堅い公務員生活を望んだ。郵便配達人になったのは十五年から二十年前のことで、苦労に見合う給料ではなかったが大いに満足していた。

郵便配達人になるとすぐに故郷の土地を売り払い、郊外の小さな家を安価で購入した。手持ちの金では足りずに残りを分割払いにし、何年もかけてようやく手に入れたものである。応接間と食堂の隣に各々ひとつずつ部屋がある簡素なつくりの家で、奥には全体の三分の一を占める台所があった。屋外には手洗い場と洗濯の流し台などがあり、そこそこの広さの庭には伸び放題のグアバの木とタマリンドの原木があった。

町の通りは平坦で、雨が降ると沼地のように水浸しになったが、それでも人は住みついた。四方を取り囲む美しい山の連なりが、どこからでも眺められる。立派な家も建ち並んでいる。その中に一軒の大屋敷があった。横長で、屋根が低く、壁の半分がアズレージョで覆われた昔ながらの外観だった。いくぶん寂れて華やかさに欠けてはいたものの、マンゴーの老木や立派なバラミツの木、高く伸びた古い木々と見事に調和していた。これらを植えた人たちは、実をつけたこの鮮やかな光景を楽しめなかっただろう。

その頃、大屋敷にはプロテスタント信徒らが集まっていた。土曜日はいつも一時間ごとに、彼らの賛歌が周辺に響き渡った。住民は

それを迷惑がりもせず、卑しい男や娼婦までもが親しみを感じていた。何かにつけて金銭を要求する神父とは違うと。

プロテスタント信徒の指導者は信念の強いアメリカ人のシャープ氏である。英語なら雄弁に聖書の教えを説くはずだが、そのたどたどしいポルトガル語にどこか惹きつけられるものがあつた。シャープ氏はあの熱心な米国人(ヤンキー)の一人だ。この人たちは折々に聖書の言葉の解釈によって分派を作ってはあちこちに広め、隣り間に信徒たちを囲い込んだ。彼らは訳も分からないまま分派を移るほど無頓着だった。

シャープ氏の下に集まった新しい信徒たちは、大屋敷のテラスか、手入れをされず荒れ放題の老木の間に張られたテントで寝泊まりした。崇高な賛歌に満ちた創立の儀式は一週間続いた。テントが張られ、賛歌が鳴り響く古い大屋敷は、駐屯地の雰囲気醸す一種の野外修道院のようだった。

周辺に正統派の信徒はほとんどいなかったが、単なる興味本位や、シャープ氏の雄弁な演説を楽しむために、大屋敷へ足を運ぶ者も少なくなかった。

このように何の抵抗にも遭うことがなかったのは、我々庶民が宗教や魔術的信仰を奔放に混ぜ合わせ、困りごとがあると、どこへでも救いを求めていたためである。日々の憂さを晴らすには魔法に頼り、頑固でしぶとい病気を治すには祈祷師を訪れるのだ。とはいえ、従順な我々庶民に、カトリック司祭が子どもに洗礼を施すのを止めるようには言わないでほしい。「息子が異教徒になるじゃないか！

神よ、救いたまえ！」と声を荒げない者などいないのだから。

ジョアキンもそうした考えを持つ人物で、妻のエングラシアも引けを取らなかった。

結婚してかれこれ二十年ほどになるが、子どもは娘のクララ一人しかいなかった。郵便配達人は混血で肌は浅黒かったが、髪はいわゆる縮れ毛だった。一方、妻の肌は夫より黒いにも関わらず、髪は癖のない滑らかな毛だった。

娘の肌の色は父親似、髪の毛は母親似だった。肩幅の広い父親は平均よりも背がかなり高かったが、母親は平均に届かずとも低いというほどでもない。クララの背の高さはちょうど二人の間で落ちていた。大きいだんご鼻の父親とは異なり、母親の外見はすらりと整っていた。クララはそんな二人を足して二で割ったような、この両親の娘そのものだった。父親の演奏に親しみ、もっぱらモディーニヤを聴いて育ったが、その艶っぽく愁いを帯びた歌声は、娘の臆病な乙女心を煙で包み込んでしまう。

父親も母親も十七歳になったクララからはいっさい目を離すことなく、大事に育てていた。ナシメントさんの酒店(ウヰ)に何か買い出しに行くのは、娘ではなくいつもエングラシアの方だった。そこは派手に騒ぐ若者たちのたまり場というより、一目置かれた常連客が顔を出すところだったのだが。

その一人のアリーピオは珍しいタイプの青年で、貧しいながらも、気立てが良く品もあつた。マレーシアの闘鶏のような見た目からは想像もできないが、気性の荒さは微塵も持ち合わせていなかった。

もう一人の常連は、近隣にある機械工場の設計士をするイギリス人のパーソンズ氏である。仕事帰りに酒店に寄ると、よくある折り畳み式の腰掛けに座り、暗くなるまで酒をちびちび飲んだり、ナシメントさんの新聞を読んだりしていた。陰気と言えるほど静かなため、話すこともまれで、「旦那」と呼ばれるのを毛嫌いした。

水腫を患う哲学者メネーゼスもよく顔を出した。彼は自分自身を博学だと思い込んでいたが、実は単なる闇の歯医者者に過ぎず、瑣末なことしか言わない。人当たりの良い年老いた白人で、立派な白い顎髭はローマ皇帝を彷彿とさせた。

ブラジル全土で一時期だけ花を咲かせた実力派の詩人J・アマラントも、たまに姿を見せた。今でも有名なかは分からない。当時、十冊の詩集は十冊とも人気を博したが、酒に溺れて周囲からも浮いていたために、儲けたのは彼以外の人たちばかり。心はすっかり荒んでいった。記憶も正気も失い、会話もままならず、言うことは支離滅裂である。その素性を知らない郊外の人たちは、彼のことを単に「詩人」と呼んだ。

酒店の常連にはまだ、六十歳を過ぎたポルトガル人のヴァレンティンがいた。四十年以上も畑仕事に従事し、腰が曲がっている。故郷の出来事や逸話を語っては、機知に富んだ美しいポルトガルの諺を披露していた。

これほど健全でありながら、クララが店に足を向けることはなかった。それでも、日曜日には父親に断って、メイエルやエンジェーニョ・デ・デントロの映画館へ女友だちと出かけることは

あった。その間、父親は仲間たちとギターを弾いたり、モデューニャを歌ったり、パラチ産のカシヤッサを飲んで過ごした。

彼らは朝早くから集まって、コーヒーを飲むとそのまま庭に出た。タマリンドの木の下に腰を下ろして、カシヤッサのボトルを脇に置き、トランプゲームに興じる。山肌が露わになった岩石だらけの山々には一瞥もくれず、妻と娘が用意する遅い昼食の時間までゲームに没頭するのであった。

それからようやくモデューニャの歌声が聞こえ始める。

ある日、日曜日の遊び仲間の一人が、こんどのジョアキンの誕生日パーティーに友人のジュリオ・コスタを連れて来ても構わないかと訊ねた。モデューニャの才能溢れる歌い手だということで、ジョアキンは承諾した。すると当日、その名高いバラード歌手が姿を現した。そばかすのある白人で、顔も体つきも取るに足らないものだった。密告者のような腹黒さやペテン師めいた特徴もなかった。着飾ってはいしたが、その服は三流の仕立屋による垢ぬけないものだった。青年らしい洒落っ気が感じられるのは、頭頂部から髪をきつちり二つに分けていることくらい。ギターを携えた彼の登場は、場を大いに沸かせた。

さまざま肌の色の女たちは、あつという間に目を奪われて、日頃の貧しさも忘れてしまう。仮面を被ったチエーザレ・ボルジア枢機卿が、教皇庁で催される父親の仮装ダンスパーティーに姿を見せても、これほどのどよめきはなかっただろう。

「あの人！ そうよ、あの人！」甲高い声が響き渡る。

若い男たちはその光景に顔をしかめて、モディーニヤの歌手に関する品のない雑談に花を咲かせた。

夫婦と娘を紹介された際、クララの大きな乳房に注がれた淫らな視線に気づいた者はいなかった。

フルート、カヴァキーニョ、ギターの三人組が奏でる音楽で、ダンスパーティーが始まった。誰もが艶めかしいサンバのリズムでポルカを踊った。

音楽が中断したところで、ジョアキンが声を掛ける。

「ジュリオさん、歌わないのかい？」

「声が出なくて」

それまで三人組の一人としてギターを弾いていたが、踊っているクララの腰の動きを舐めるように見ていたのだ。父親が青年と話をしていることに気づいた彼女は、嬉しくなってやはり訊ねる。

「ジュリオさん、歌ってくださらないの？ とてもお上手だって聞いているものですから……」

この「とても」のところは甘く引き伸ばすようだった。

「いえいえ、そんな。みんなが優しいだけで……」

ジュリオが両手で髪を整えていると、クララが言う。

「さあ、お歌いになって！」

「そうおっしゃるのであれば、歌いましょう」

たいそう気取ってギターを手に取ると、弦を鳴らして告げる。

「愛と夢」

そして叫ばんばかりの大声でモディーニヤを歌い始めると、しば

らくして声を落とす。歯擦音や震え音を響かせた悲哀と憂鬱に溢れるその歌にはひどい隠喩が目立ったものの、心はこもっていた。この様子を前にして、単純な聴衆は頭の中で夢を大きく膨らませ、願望を抱き、期待と将来を思い描くのである。演奏が終わると盛大な拍手が沸き起こったが、クララだけは手を叩かず。歌の間ずっと夢見心地で、終わったあとも心ここにあらずの状態だった。

数日経ったある午後、クララはふと窓辺に立った。それほど驚きもなく、そうなることが分かっていたかのように、物憂げなあの歌手に会釈をされたのである。邪よこしまなところは感じられず、無邪気に母親に訊ねた。

「お母さん、誰が立ち寄ってくださったか分かる？」

「どなた？」

「ジュリオさんよ」

「ジュリオ？」

「お父さんの誕生日に歌ってくれたあの人よ」

ジョアキンの華やかな誕生日パーティーが行われた後も、何も変わらない毎日が続いていた。日曜日には、図書館用務員のエレウテリオや市警のアウトグストがやって来て、カシャッサの入った小さなグラスを片手にトランプゲームに興じ、午後にはギターの演奏もした。そこに新たな仲間が加わるまで時間は掛からなかった。そう、あのジュリオ・コスタ。アウトグストの親友であり、歌の先生でもある、郊外に住む有名なモディーニヤの歌手だ。

町中からの招待で引っ張りだこのジュリオは、夕食を共にするこ

とがほとんどなかった。トランプゲームには付き添いつつも、酒はあまり飲まない。遅い時間までいることはなかったものの、クララとの距離を少しずつ詰めていった。ふつくとした丸い大きな乳房の虜になり、際限のない肉欲を刺激され興奮が抑えきれない。初めは視線を交わすだけだった。彼女は不安に駆られながらも遠慮がちに見つめ返した。白いところが隠れるほど黒く潤んだ、大きな瞳で。しばらくすると、人目を忍んで甘い言葉を交わすようになり、ついには運命の手紙が届く。

それを受け取ると彼女は胸元にしまった。ろうそくの下、横になつて胸を高鳴らせながら恐る恐る読んだ。ご想像のとおり、綴りや文法はたいそう珍妙なものだったが、「愛する人たちの守り人」⁽⁹⁾を真似もせず、彼自身の言葉が並んでいたのは嬉しい驚きだった。目を通すと、クララの無垢な心は激しく揺さぶられ、瑞々しく、奇妙な、それまで一度も味わったことのない何かが沸き上がってくるのを感じた。返事を書くべきか、突き返すべきか。どうすれば良いのか分からず、なかなか寝付けなかった。厳しい眼差しを向ける父親と酷い言葉を浴びせる母親が脳裏をよぎった。ただ結婚したいだけなのに。飼い主のいない犬のような人生を送り続けるわけにはいかないから。二人が死んだときに独りぼっちで生きて行くわけにもいかない。でも……。彼は白人で、自分は混血^{ちゅうけつ}。いや、それが何だつて言うの？ そんな恋人同士なんていくらでも見て来たじゃない。頭にも浮かぶ。いったい何が駄目なの？ あの人は愛情たっぷり言葉掛けてくれた。息が上手くできなかつたり、ため息を吐

いたり、涙を零したり。張りのある乳房は穢れのない愛の苦しみで張り裂けそうだった。返事を書こう。そうして翌日には実行に移した。ジュリオ・コスタは長居するようになり、手紙のやり取りも続いた。母親は娘のおかしな様子に気づいていた。

「ジュリオさんとお付き合ひでもしてるの？」

「何言ってるの、お母さんってば！ そんなこと……」

「ああ、やっぱり！ 分からないとも思うの？」

娘が泣き出すと、母親は口を噤んだ。クララは少し落ち着くと近所に住む黒人の少年アリスティデス呼び、今日のことを手紙に綴ってバロード歌手へと届けさせた。

隣の駅近くに住むジュリオ・コスタ一家は、恋人のクララ一家よりも社会的地位が相当に上だった。父親は市役所の安定した職に就いており、息子とは似ても似つかない。真面目で、物静かで、几帳面という優秀な公務員にありがちな融通の利かない性格をしていたので、息子の恋人が家でダンスをするなど考えられなかった。反対に、母親は夫に似ず、むしろ行儀やマナーに疎く、食べ物を手でつまんだり、裸足で歩き回ったり、近所の人の陰口や噂話を好んだ。それでも、上流階級の人でいたいとの思いは内に秘めていた。

ジュリオのほかに娘が三人いた。長女はすでに役所で助手をしていたが、次女は教員養成学校に通い、末っ子は音楽学校の生徒だった。

三人とも父親に似て家柄に高慢なほど誇りを持っていたので、結婚相手は大卒の男に限られた。メルセデス、アデライデ、マリア・

エウジェニアは、兄の素行の悪さ、ギター、庶民の娯楽である鬪鶏、教養のなさを大に見下していたものの、クララが義姉になるなど耐えられるはずがないだろう。

平凡な中流階級で財産もない三姉妹だが、地位のある父親のおかげで幾らかお金のかかる学校に通ってきた。クララを受け入れようとは思っていないだろう。彼女にあるのは使用人になる未来だけだ。

とはいうものの、穏やかで愛情深く、無垢で親切なクララの性格は、三姉妹の兄よりよほどまともだった。それに、貧しい家庭環境のために十分な教育が受けられなかったにもかかわらず、教養もあった。ジュリオは字の読み書きも満足にできず、映画の筋を追うための集中力にさえ欠けた。愚か極まるこの男の知性は彼の作るモデーニャにも表れていた。それは自意識過剰で、好色男の淫らな想像が生んだ妖しい表現でいっぱいだった。

未成年に対する強姦で警察官と揉めたのは、一度きりではなかった。二度目から、父親のバンデイラ大尉マジョルは関わり合うのを避けた。しかし、母親のイネスはジュリオが粗相を働いた十六歳の黒人の少女との結婚を止めさせようと、泣きながら夫に訴えたこともある。一家の清らかな血筋を守るために。

心の底から性格が悪いわけではないが、世間知らずで偏見に満ちたイネスの心では、将来生まれる不幸な孫を温かく育てることはできない。まったく後悔もせず、その子の存在をなかったことにしたので。

ジュリオにうんざりした父親は見切りをつけ、顔を合わせもしなかった。地下室か大屋敷の隅が息子の居場所で、そこには見るに堪えない野蛮な鬪鶏の檻もあった。鶏の売買と鬪鶏が生業だった。取引、売却、卵の世話、賭けて稼いだものに加えて、母親からの小遣い銭で生活をし、服まで買う始末で、いわば根っからのすねかじりである。その頃、リオデジャネイロ郊外や市内のあちこちには同じような人間が溢れていた。

母親は息子が警察沙汰になればまた面倒になると気が気でなく、異性関係には目を光らせていた。それだけに、クララとの一件を知ったときには、頭に血が上って叱りつけた。息子は何も言わずにかしこまって聞いていたが、恋人にすべてを伝えねばと思って自分なりに手紙をしたためた。

愛しのクララ　きのう受け取った君からの手紙を母さんに見られてしまっておどろいて君を愛していること、尽くしていること打ち明けたら、家族みんなから反対されて、だからあの人たちのゆうことは気にしないようにと伝えたくて。ほくが苦しんでることわかってほしいです。

前の手紙でおねがいをしたことだけど、どうかな。
君を思うこのあわれな男のさみしさはつるばかりで心も満たされない。

君の恋人ジュリオより。

クララは恋人の文章と綴りには慣れていた。ただ彼女の方が遙かに上手く書けるとは言っても、字の読み書きすら満足にできない好色男を軽蔑するほどの教養はなかった。おまけに、モディーニヤの歌手としての魅力と結婚への執着心が、冷静な判断を邪魔していた。そして、その手紙はジュリオの思惑どおりになる。クララは涙を流し、胸を高鳴らせ、漠然とした不安と期待を抱きながら、魅惑的な未知なる空を遠くに見た。加えて、その誠実さと愛の言葉が散りばめられた手紙は、クララの心の中で彼の額にかかる髪をきらきらと輝かせた。数日後、約束どおり、彼が入って来られるように部屋の窓を開けたままにした。それから毎晩のようにその大胆な行為は続いたが、長居することはなかった。

日曜日になると家に来て、歌を歌う。二人の間には何ごともないかのように思われた。ある日、クララは下腹部に違和感を覚えた。恋人にそのことを伝えると、何てことないよ、大丈夫だからと言う。だが、そうではなかった。子どもができたのだ。彼は泣きじゃくるクララを宥めながら、結婚を誓った。お腹は日に日に膨らんでいく……。

モディーニヤの歌手は以前ほど姿を見せなくなり、次第に足を遠くかせていった。クララの涙は止まらない。まだ誰も妊娠には気づいていなかったが、娘を思う母親だけは異変を感じ取り、何があったのか打ち明けるように迫った。クララはもう隠しておくこともできずすべてを語った。哀れな二人の女は、取り返しのない現実を前に抱き合って泣くしかなかった。

「ねえ、お母さん。お父さんに伝える前に、向こうの家に行ってお母様と話をしてもいいかしら？」クララは訊ねる。

母親はしばらく考えて、「行っておいで」と答えた。

クララは素早く着替えて出て行った。高慢な態度で娘に出迎えられると、ジュリオの母親に話があると告げた。出てきた女に不愛想な挨拶をされたが、クララは勇気を振り絞り努めて冷静に、自分の過ちと不運を洗いざらい告白した。

「それで、私にどうしろって？」

「彼と結婚させてほしいの」クララは一息に言う。

「まあ呆れたわ。身の程をわきまえないさい。息子があんなのような血筋の人間と結婚できるとでも思ってるわけ？ 息子があんなを連れ回したわけじゃないでしょ。さっさとお帰り。厚かましい娘だね」

クララは何も言い返せずに踵を返すと、みっともない姿を見られないよう涙を堪えながら歩いた。何だったの、あれは？ これといった肩書も取り柄もないあの放蕩息子と結婚ができないなんて。一体どうして？

社会的な身分が永遠に劣等なままであることを目の当たりにした若い女の子なら誰もが憧れるありきたりな夢を持つことすらできないとは。お父さんとお母さんは何のためにあんなに大切に育ててくれたの？ 身分や夢の限界から目を反らせたのは、無駄で逆効果だったのでは……。帰路を急ぐ。家に着いても父親は戻っていなかった。

母親のもとへ駆け寄ると、涙を流しながら何も言わずに抱きつい

た。母親も泣いていた。クララは泣き止むと、肩を震わせながらこう言った。

「お母さん、私は生きてても意味のない人間なのよ」

注

- (1) 翻訳の底本は BARRETO, Lima. Clara dos Anjos. In: *História e sonhos* (edição preparada por Antonio Arnoni Prado). São Paulo: WMF Martins Fontes, 2008, pp. 205–221. を使用した。
- (2) ブラジル文学アカデミー HP: <https://www.academia.org.br/noticias/abl-promove-ciclo-de-conferencias-sobre-semana-de-artemoderna-de-1922> (acesso: 2022.05.21)
- (3) Espalhe Lima HP: <https://www.espalhelima.com.br/#inicio> (acesso: 2022.05.21)
- (4) ジョゼー・カンティド・デ・アンドラーデ・ムリシ (José Candido de Andrade Muricy: 1895–1984) は、ブラジルの文芸批評家、作家、エッセイスト。ブラジル音楽アカデミーの総裁を務めるなど、音楽評論家としても活躍した。
- (5) イタリアのオペラの影響を受けたブラジル及びポルトガルの抒情歌で、十八世紀から十九世紀にかけて流行した。ギターを伴奏に歌われる。
- (6) ブラジル南東部にあるミナス・ジェライス州の都市。
- (7) 立ち飲み場を備え、雑貨も販売する店。
- (8) Cesare Borgia (1475–1507)。教皇アレクサンデル六世の私生児。
- (9) 二十世紀初頭に活躍したブラジル近代主義時代の作家で詩人オズワルド・デ・アンドラーデ (Oswald de Andrade: 1890–1954) の詩。

参考文献

- BARBOSA, Francisco de Assis. *A vida de Lima Barreto: 1881–1922*. 11ª ed., Belo Horizonte: Autêntica Editora, 2017.
- BARRETO, Lima. *Clara dos Anjos*. 1ª ed., São Paulo: Penguin Classics Companhia das Letras, 2012.
- BARRETO, Lima. *História e sonhos* (edição preparada por Antonio Arnoni Prado). São Paulo: WMF Martins Fontes, 2008, pp. 205–221.
- LIMA, Elizabeth Gonzaga. Do conto ao romance: o processo criativo de Lima Barreto entre a forma literária e o suporte. In: *O eixo e a roda*. Belo Horizonte, v. 25, n. 2, 2016, pp. 105–126. http://www.periodicos.letras.ufmg.br/index.php/o_eixo_ea_roda/article/view/10549 (acesso: 2022.05.20)
- PRADO, Antonio Arnoni. Introdução. In: BARRETO, Lima: edição preparada por Antonio Arnoni Prado. *Histórias e sonhos*. São Paulo: WMF Martins Fontes, 2008, pp. IX–XXIX.
- RESENDE, Beatriz. Em defesa de Clara dos Anjos. In: BARRETO, Lima. *Clara dos Anjos*. 1ª ed., São Paulo: Penguin Classics Companhia das Letras, 2012, pp. 9–24.
- SCHWARCZ, Lília Moritz. Introdução – Lima Barreto: termômetro nervoso de uma frágil República. In: LIMA BARRETO. *Contos completos: organização e introdução Lília Moritz Schwartz*. São Paulo: Companhia das Letras, 2010, pp. 15–53.

“Clara dos Anjos”, de Lima Barreto

Masayuki Kibe

〈Sumário〉

Está é a tradução para o japonês do conto “Clara dos Anjos”, de Lima Barreto (1881–1922). A obra originalmente foi lançada na revista *América Latina* em 1919 e só no ano seguinte foi incluída no livro de contos *História e sonhos*. Depois da morte do escritor, “Clara dos Anjos”, já expandida em romance, foi publicada como folhetim na revista *Souza Cruz* entre fevereiro de 1923 e maio de 1924 e, finalmente, em 1948, saiu como livro de mesmo nome.

O ano de 2022, além de marcar o centenário da morte de Lima Barreto, também foi comemorado pela Academia Brasileira de Letras, instituição sediada no Rio de Janeiro, terra natal do autor, em virtude dos cem anos da realização da Semana de Arte Moderna, marco da literatura brasileira no século XX.

Lima Barreto nunca foi o membro da Academia, mas será para sempre um dos escritores mais importantes do país, junto com Machado de Assis e José de Alencar.